

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷四十五第

月六年七十和昭

論叢

條件統制と需給統制

文學博士 高田保馬

廣域經濟の貿易理論

經濟學博士 谷口吉彦

東亞資源論の課題

經濟學博士 蜷川虎三

葉適の貨幣思想

經濟學士 穂積文雄

研究

儲蓄銀行の課題

經濟學士 徳永清行

テニールの歴史觀

經濟學士 出口勇藏

民國に於ける外國銀行の發展

經濟學士 小寺武四郎

說苑

支那工業に於ける株式會社企業の位地

經濟學士 岡部利良

附錄

彙報

本誌第五十四卷總目次

葉適の貨幣思想

穗積文雄

葉適字は正則、水心と號す、温州永嘉の人、宋の紹興二〇年(西紀一一五〇年)生まる。わが近衛天皇の御代久安六年のことである。淳熙五年(西紀一二七八年)、進士第二人に擢でられ、平江節度を授かり後、累官して寶文閣學士通議大夫に進む。その間入りては侃諤の論を吐き、出でては戎軒を事とした。嘉定十六年卒す年七十四。光祿大夫を贈られ、謚して忠定といふ。適もと博學雄才、藻思英發、志意慷慨、經濟を以て自ら負ふといはれる¹⁾。景望・鄭伯熊の門に出で、陳良傳とともに永嘉學派の棟梁とあがめらる。永嘉學派は南宋儒學派中の一派にして、宋儒の究理性命の學の煩瑣をいとひ、道は治國平天下にありとし、功利の教を説くものである。著はすところ水心集、水心別集がある。しかし、明のときすでに完本なく、水心集の方は正統十三年(西紀一四四八年)のころ章貢黎諒が散佚を接拾し重ねて編刻し、遂にまた世にあらはれたが、別集の方は僅に陳伯玉の書錄解題に見ゆるのみで、前述の黎氏が正集を編せるときよりすでにその全をみるをえず、乾隆年間清の朝廷が、四庫館を開いて廣く天下の遺籍を搜索して目錄を著はせるときも、また僅に黎の編せる正集にすぎず、その湮没すでに久しきものがあつたのであるが、同治四年(西紀一八六五年)ころその故里瑞安より永嘉諸先生の遺書夥しく出づるに至り、この別集寫本また中に在り、同治九年十一月(西紀一八七〇年)李春蘇の手によりて校刻せられることゝなつた²⁾。正集は奏劄一

1) 宋史、卷四三四、列傳第一九三、儒林四、葉適、參照。
2) 永嘉叢書、水心別集、李春蘇序に據る。

卷、狀表一卷、奏議三卷、詩三卷、記三卷、序一卷、墓銘一十三卷、行狀、謚議、銘、青詞、疏文一卷、祭文一卷、書、啓一卷、雜著一卷凡そ二十九卷八百餘篇よりなり、「その議論謀猷を見るに、民彝物則の常に本づき、以て人心を正し、天理を明らかにし、賢を求め、官を審かにし、兵を訓へ、財を理するにいたりては、一切諸を政事の間に施し、以て國體を隆にし、時艱を濟はんと欲す、然れども未だ大に用ひられるにいたりず、道盛に行はれず、今のみるところ惟その文のみ、豈惜しむべきにあらずや云々」といはれるところであるが、それでも、なほ、「其雜駁なる別集の組織體裁備はれるるるに加かず」とせられるところである。以て別集のいかにすぐれたるものであるかを想見すべきであらう。

別集は、進卷、八卷、すなはち、序發、君德一・二、治勢上中下、國本上中下、民事上中下、財計上中下、官法上中下、士學上下、兵權上下、外論一・二・三・四、總義、易書、詩、春秋、周禮、管子、老子、孔子家語、莊子、揚雄太玄、左氏春秋、戰國策、史記、三國志、五代史、總述、皇極、大學、中庸、傳説、崔寔、諸葛亮、蘇綽、王通、廷對一卷、外稟六卷、すなはち、始議一・二、取燕一・二・三、息虛論一親征一・二待時、實謀、財總論一・二、經總制錢一・二、和買、折帛、茶鹽、兵總論一・二、四屯駐大兵、兩禁軍弓手士兵、法度總論一・二・三、資格、銓選、薦舉、任子、科舉、學校、制科、宏詞、役法、新書、吏胥、監司、紀綱一・二・三・四、終論一・二・三・四、五・六・七、上殿劄子、淳熙十四年、應詔條奏六事及び後總一卷より成り、中に就いて、治勢、財計、外論、始議、取燕、息虛論、實謀、財總論、兵總論、四屯駐大兵、兩禁軍弓手士兵、法度總論、資格、銓選、薦舉、任子、科舉、學校、制科、宏詞、役法、新書、胥書、監司、紀綱、終論は正集も別集と同じく收むるところでありながら、しかも、正集においては、治勢の中下、財計の中下、外論の三・四はこれを缺く。それよりして、われ

3) 重刊葉水心先生文集序。

4) 田崎仁義博士、葉適、經濟大辭書所收。

はすくなくとも、經世の論議としては正集に比し別集がはるかにまされるを知ることができるかと思ふ。まことに、「其治を論じ、安民を策し、富強を計るの精透切要なる、蓋し經世の重寶にして、支那近世經濟思想學說の代表的文字となす」と稱揚せらるゝもむべとすべきところに屬するであらう。そして、その財計の中はまさに、貨幣に関する論述にして、葉適の貨幣思想をうかゞふに最もよき根本資料である。それで先づ次にこれによりて彼の經濟思想をうかゞふこととする。

二

葉適の貨幣思想を水心別集・卷第二・進卷・財計・中についてうかゞふ。すると私はまづ彼が、銅錢が足らず、これを補ふために楮を以て幣を造るにいたる、するとやがて銅錢が楮(紙幣)に支配せられ、楮行はれて銅錢がますます少くなる、これが今日みなのお患とするところで、よく救ふなきものである、とするをみる。こゝに彼が、楮の行はるゝは錢の足らざる故であると斷するところは、まさにわが意を得たるところで、事實、彼の當時はさすがに鑄錢の盛んであつた末においても、銅の不足のために鑄錢の量やうやく減退し、しかも政府の支出はますます多きを加へ、ために楮幣の増發が必至であつたのである。それで事情を正當に判斷すれば錢足らずして楮幣を生ずるといふことは容易に識認せらるべきところで、水心と並べ稱して、「同時講學の諸儒、東萊呂氏より外、よく及ぶ莫し」といはれる、その呂東萊も、「今日の楮券を爲る所以、……その原は錢少きに在り」といつてゐるところである。しかし、だからといつて、それが、立派な判斷であることに變はりが無いことはいふまでもなく、それはやはり稱讚に價することは勿論でなければならぬであらう。

そして、すでに銅錢の不足を紙幣で補ふことになれば、紙幣はもと素材の制約より解放せられてをり、從て、

5) 田崎仁義博士、葉適、經濟大辭書所收。
6) 李春蘇、水心別集序。
7) 文獻通考、卷九、錢幣考二。

政府の財政難とも増發濫發に陥ることとはけだし不可避とも稱しうべきところであるが、葉適はすでに這般の事情を洞察するが故であらう、ついで、「意に率つて戲造し、猥りに以て一時の闕を補ひてしかうして遂に後日の憂を貽ふ」と警告する。

なほ、こゝに彼が、楮が行はれて錢がますます少くなるといふのは、そこに所謂「グレイシアムの法則」の識認があるとなしうるかとも思はれるのであるが、それにしても、錢がかへつて楮の支配を受けるにいたるのは何故であらうかといふに、彼はそこで、紙幣が使用に便利なといふ特點を認めるに吝かではない。すなはち曰ふ。「糶を擔ひて趨ぐに一夫の力に勝ゆる輒ち錢數百萬たり、云々」と。かくて、彼の言葉によれば、「大都市肆、四方集まるところまた金錢の用ふるあらず、ことごとく楮を以て相貿易する」こととなるわけであるが、それでよいのかといふと、彼はそれでは、結局、銅錢と財貨を少くし、乏しからしめることになり、さうしてゐると、十年の後には、四方の錢また藏して用ゐられざるにいたり、人々はいたづらに空券をとつて、皇々焉として従りて得るところなくなるべしとして、「これ豈天下の大憂にあらざらんや」と斷ずる。

しからは、それを匡救するにはいかにすべきかゞ次の問題となるであらうが、そこで葉適の考ふるところはかうである。銅錢が無いから無いとか、紙幣が有るから有るといふふうに、たゞ表面にあらはれたる現象を識認するだけなら誰でもできる。だがそれでは、問題を解決するには役に立たぬ。いやしくも智者を以て任ずるほどのものは、その有無の事象のよつてきたるところの要因を推究把握せねばならぬ。さすれば、上述の憂患を除去することなど易々たるものである。彼はさやう考へる。いま、これを彼の簡潔な言葉で示せば、曰く、「その有るをみて因りて有るをいひ、その無きをみて、因りて無きをいふはこれ常人の識のみ、智者に責ぶところはその有

無のよりてきたるところを推す、手をかへさずして以てその患を除くべし。そしてこの句を讀むとき、私は明治初年の歐洲經濟思想渡來の黎明期よりしてわが國になじみ深い、かのフレデリック・バスタアの有名なる「見ゆるものと見えざるもの」の論議を想起せざるをえぬ。バスタアはいふ。經濟の領域における「の行爲、一の慣習、乃至一の制度、一の法律は單に一の結果を伴ふに止らず、一聯の諸結果を隨伴せしむる、これらの諸結果の中のあるものは直接的であり、原因と同時に發現する、それはすなはち、「眼にみゆるところのもの」である、いま一つのものは一定の經過をたどりて展開する、それはすなはち、「眼にみへざるところのもの」である、この「眼にみへざるところのもの」がよく豫見せられるならば、われ／＼の幸これにしかずである、經濟家の優劣のわかるゝところは實にこゝに存する、悪しき經濟家はたゞ「眼にみゆる」結果のみで満足するに反し、善き經濟家は「眼にみゆるところのもの」はもとよりのこと、「豫見を要すところのもの」をも考慮する云々。一はみへざる原因を推究せよといひ、一は見えざる結果を考慮せよといふ。その方向は逆であるけれども、要するにいたづらに現象形態に眩惑せられずその背後に存する因果關係を把握することの重要さを説くにいたりては一で、まつたく、符節を合はすがごとくであるといふべきではなからうか。

ところで、話を本すぢにもどして、さて、それでは、有無の因つてきたるところを探ぐりてその匡救の道を求むれば一體どうなるか、といふに、彼は、そも／＼錢の缺乏といふことがはたしてまことに缺乏とすべきものなるや否やと自問する。それははたして上は用足らず、下は賣買するを得ぬものであるかといふのである。そして彼は然らずと自答する。すなはち彼によれば、銅錢は眞に缺乏すべきものではなく、少くともこれに對しては二つの手段が考へられるとする。しからは二つの手段とは何ぞやといへば、防錢の禁と羨錢の術である。防錢の

8) Frédéric Bastiat, Ce qu'on voit et ce qu'on ne voit pas, Sophismes économiques. (Oeuvres complètes 5).

禁といふは銅錢を他境へ持ち出すこと、及び銷毀して以て器物を造るを禁ずるをいふ。この禁が嚴重でないから銅錢が缺乏することゝなるのだからこれを嚴重にせねばならぬとする。羨錢の術とはすなはち鼓鑄のことである。しかし、これには彼は疑問を持つものゝごとく、鼓鑄するといつても、銅がなければ仕方がないではないかといふ。まことにものつともなことである。しかし、それでは問題は防錢の禁だけにすぎぬかといふと、彼はまだ一つのものがあつて存するとする。それは銅錢の蓄藏である。それは冒頭のグレイシアムの法則の識認あるかと推想したところを想起すれば別に驚くにもあたらぬところかとおもふが、彼はそれが、錢缺乏の重大なる一因であると指摘する。げにまたもつともなところとせねばならぬ。しばらく彼の言葉をそのまゝ引用すれば、曰く、「錢の上下これを尊ぶ所以は、……そのよく百物の用を通すればなり、積みてしかうして發せざれば、すなはち一物に異るなし、……いたづらに錢の以て積まざるべからざるを知りて、その障固うしてしかうして流れざるを知らず、いたづらに積の以て多からざるべからざるを知りて、そのすでに聚むるものゝ散ぜざるを知らず、楮を外に役して以てその勞に代へ、しかうして天下坐鎮移すなきの錢あり、これ豈、智者のなすところならんや、豈、その思慮のいまだ及ばざるものあらんや」かくてこれらの手段が充分によく行はれるならば必ずしも錢の缺乏といふことを患へるにもあたらぬとするのであらう。それで、今これらの手段を充分につくさず、それどころか、政府みづから錢を蓄藏しておいて、錢足らずといつて楮にのみたよるは不可なりとすることになる。しかしさうすると、冒頭、彼が楮幣の行はるゝは錢の足らざる故であると斷ぜると矛盾するかの觀を與へるかも知れぬが、それは必ずしもさうではない。けだし、楮幣の行はれるは錢の不足によるのはやはりさうであるが、さて錢の不足は何によるかといへばそれは、銅錢の流失、銅錢の廢毀乃至銅錢の蓄藏に因る、だからこれらを克服すれば、銅錢足らざ

るを患へず、従て楮幣ひとり横行するの弊なきを得るといふことになるわけであらう。もつとも銅の不足のために鼓鑄の量やうやく減退したことはいかんともできぬがそれは彼も自ら承認してゐるところであり、そしてそれは恐らく彼によれば、銅錢不足の一因には違ひないが、程度の問題で、上述の諸方策を行へば、たとへこの點は克服できずとも、銅錢影を消して楮幣汎濫するやうなことは避けることができるであらう、といふものと解すればよいであらう。

次に、彼は怪しむ。いま錢が少くなつたとはいつても、上より下には、兵の料とか吏の俸として錢が與へられ、下より上へは、州縣の鹽酒雜貨の專賣の代金として錢が納められ、人民の貿易輸送にもなほ大抵みな錢幣が行はれる。してみると銅錢はすべて減置はせられず、まだく相當用ゐられてゐるかと思はれる。それでいまを前代に比較すれば錢はまだすつと多い筈である。それなのに錢の少ないのをかこたねばならぬのは何故であるか。それについて彼の考へるところはかうである。それは昔は貨幣價值が大で物價が安かつたからであり、また昔の治安の時代には、唐の太宗の時代のごとく、物資が豊富で、民は殆ど自給でき、銅錢を用ふる必要がさうなかつたからである。そしてさう考へてくると、「今日の患は錢多くして物少なく、錢賤しくして物貴きなるや明らかなり」といふことになる。勿論彼とて今日でも白給のできる者もあるのをみとめはするが、十中六まではさうはゆかぬとする。それでそれらのものは、錢が多くて物が少ない故に「結局空錢を持つて以て物を制する」ことになるわけでその不可なることいふまでもないが、さらに、紙幣が盛行するにつれて、「空券を持つて以て錢を制する」にいたつてます。憂患の大なるものなきを得ぬとする。そしてその考へ方において、「空券を持つて以て錢を制する」を恐れるは、金屬說の思想より解脱するを得ざるを示すものであり、貨幣の本質が交易の手段た

るに在ることを理解するものとごとく、「錢の上下これを尊ぶ所以は……そのよく百物を通ずればなり」といふ彼にしてなほこの執あるかと惜しまざるを得ぬが、「今日の患は錢多くして物少なく、錢賤しくして物貴きなるや明かなり」といへるにおいて、いはゆる貨幣數量説の思想、悪性インフレーションの識認をうかゞふことができるにあつては、また尊敬の念なきを得ぬものがある。

三

葉水心の貨幣思想をうかゞふべき資料としては、さらに、元の馬端臨が文獻通考の錢幣考の終りににおいて「水心葉氏曰く」として引用せるところのものがある。それは今日水心集の正別いつれにもみあたらぬやうであるが、やがて明かとなるごとく、一脈前記別集の財計中にあらはれたるものと相通するところがあるし、また、冒頭にもいへることく、水心集は亡佚してゐたのを明の時代編纂したのであるから、元の馬端臨の時代に存してゐたものが今日には傳はらないことはありうべきことであるからして、かたゞ以てこれを水心の論述にあらずとすべき理由はなりたちにいくいと考へられよう。しからばこれもまた水心の貨幣思想をうかゞふ根本資料として珍重するに足ることとすることができようか。それで葉適の貨幣思想をうかゞはんとするわれ／＼はさらに進んでそれについて考察するところあらねばなるまい。以下それを試みる。

それによると、われ／＼はまづ、彼が錢の發生の因を交易に求めて、「錢幣の起るは商賈通行し、四方交至し、遠近の制物は以て自ら行ふべからず、故に金錢を以てこれを行ふより起る」となすをみる。従て、昔は錢の行はること少なく、今は錢の行はること多く、彼のいはゆる、「古は物に因り、これを權るに錢を以てし、後世は錢に因り、これを權るに物を以てす」の所以を説明して、「三代以前、錢極めて少なき所以は、當時、民常業

あり、一家の用、穀米布帛蔬菜魚肉より、みなその力により以て自ら致す、計るにその錢を待ちて具はるもの幾もなし、たゞこれ、商賈の貿遷と朝廷の天下の物を權る所以、しかる後錢幣の用に頼るのみ。……土地の宜しきところ、人力の食ふところ、穀粟にあらざればすなはち布帛、それ民の自ら致すところのもの、みな金錢を待つなくして民本に安んじ、業に著く。金錢また用無し。故にこれを用ふるいたつて少なし。……後世はしからず、百物みな錢より起る。故に錢に因りて物を制し、布帛すなはち丈尺の數あり、穀粟斛斗の數あり、その他凡そ世間飲食資生の具、みな錢より起る。銖兩の多少、貴賤輕重、みな錢によりて制す、上は朝廷の運用より、下は民間の輸貢、州縣の委藏、商賈の貿易より、みな錢を主とす、故に後世錢を用ふる、前より百倍す」といひ、または「三代各々その國を斷じて以て自ら治め一國のもの自ら以て一國の用に供するに足る、これ天下通行不可闕のものにあらざれば、また心力を費やして以てこれを營むにいたらず、上また禁戒を明かに立て、天下をして力を窮め遠く須ひしむるを要せざればなり」といひ、書に「惟れ土物を愛す、その心臧善し」とあり、老子に「政治の極、民その食を甘しとし、その服を美しとし、その俗を樂しみ、鄰國相望み、雞犬の聲相聞え、民老死にいたるまで相往來せず」とありとしてこれを例證し、從て錢を用ゐること少なしと斷じ、「後世は天下すでに一國たり、州縣名を異にするありと雖も、しかも、秦越相知らざるの患なく、臂指一のごとし、天下の民安んぞ四方に交通せざるを得ん、すなはち商賈往來し、南北互致することまた前世より多し、金錢安んぞ多からざるを得ん」云々」といふ。

次には、かくて貨幣時代に入れば、その錢をいかにすべきやが問題となるわけであるが、これについて、葉適は、それが重すぎても輕すぎても、大きすぎても小さすぎてもいかにとする。それではその標準はどこに求むべ

まかといへば、古來の通説と同じくやはり唐の開元通寶錢をあげる。そして造錢においては例の南齊の孔穎の「銅を惜しまず、工を愛せず」の原理を把持したであらうことは、その「國初惟錢好を要め、工費を計らず、後世惟その富を欲し、往々工を減じ費を縮む、錢稍々惡しき所以」といへるよりして推想することができようか。そして私鑄の是非の問題については、これを非と斷すること、その「利權まさに上に歸すべし、豈民とこれをもにせんや」といへるによりて明かとなしえよう。

それから次には、錢の機能が論ぜられるをみる。われはすでに最初において葉適が錢の成因を論じて交易にありと述べるをみた。そしてそれは、すなはち、また、錢の機能が交易の媒介にあることを説くものであらねばならず、従て、すでに早く、それにおいて錢の機能が説かれてゐるといつてよい。しかし、だからといって、あらためて、錢の機能を説いていけないわけはあるまい。いな、最初のは錢を成因の側からながめ、いまはこれを機能の側からながめるのだとすれば少しも變ではあるまい。しからはわれも、こゝにあらためて彼の貨幣機能觀をうかゞつても重複の譏を受けねばならぬこともあるまい。しからは、葉適は錢の機能をいかにみるかといへば、それはあらためてこととはるまでもなく交易の媒介にあること、「錢貨、留藏蓄積の道なく、惟通融流轉するのみ、まさにその功用をみるべし」といへるよりして、こゝにおいてもこれを推定するに難くないと思ふ。だが、彼は貨幣の機能をたゞ單に交易の媒介とみるだけにとゞまらず、錢のもつ購買力、左右田喜一郎博士のいはゆる「無限の Zweck に對する結び目 (Knotenpunkt) を形成する」¹⁰⁾點を識認して、いはゆる貨幣の萬能力を肯定し、はるかに晉の魯褒の「錢神論」に通ずること、彼が「錢貨は至神のもの」といへるよりしてまさに推定しうるところでなければならぬであらう。

10) 左右田喜一郎博士、貨幣論上に於ける限界效用學說 (全集卷第二所收)

それはともかく、すでに錢の機能を交易の媒介にありとし、從てたゞその通融流轉するところにその功用をみ、その留藏蓄積をその道にあらすとする以上、葉適が、朝廷が天下の錢を王府に入れ、すでに入るものはこれを出でしめざるを攻撃して、「錢通行するを以て天下利となすを知らず、錢これを積む甚だ多しと雖も他物と何ぞ異ならん」と論じ、錢少きの因こゝにあるを究めず、たゞ、錢を以て少なしとなし、紙幣を用ひふべしとし、紙幣が用ひられて錢はますます少なくなり、たゞに物がみるべからざるにいたれるのみならず、錢もまたみることでできぬやうになつたとするも不思議はない。こゝらあたりはあきらかに前掲の水心別集にみられる思想と區別し難いものがあるであらう。そして今日かくのごとき事態をみるのは決して一朝一夕の結果ではなくて昔より今にいたるまでの弊が相ついでことごとくにいたつたものであるとする。しかるに、葉適によれば、「こと極まりて變じ、もの變ずれば必ず更めて作新の道あるに及ぶ」が故に、錢法もこゝまで行き詰まれば極まれるものといふべきであるから必ずや一新生面を展開するはずであるとみる。しからはそれはいかなる新路をひらくかといへば、それは何ともいへぬが少なくとも次のことは確であらうといふ。それはすなはち、「交子を廢して、しかる後所藏の錢をしてまた出ださしむべし」といふことである。これもまた、水心別集においてすでにうかゞへるところのものであるからあらためて説くまでもあるまい。

最後に、葉適は、「もしそれ富強の道はもの多きにあり、もの多ければすなはち賤し、賤しければ、すなはち錢貴し、錢貴くしてしかる後輕重權るべく、交易通すべし、今の世錢至つて賤し、錢賤しきは、もの、少なきによる」と結んでゐるが、こゝにわれ／＼は、彼が、貨幣の機能の偉大なるをみとめて遂に至神のものともまで呼びながら、しかもよく貨幣の機能が交換の媒介たる點においてなりたつにすぎざる所以を忘れず、物あつての貨

幣なる理法をよく把握しをるを尊敬の念を以てみとむるともに、そこに貨幣數量説の思想をうかゞふことができ、こゝにまたわれは別集にうかゞへる水心の思想をみいだす次第である。

なほついでながら、「こと極まりて變じ、もの變ずれば必ず更めて作新の道あるに及ぶ」とする思想は、古くは太史公・司馬遷の「もの盛なればすなはち衰へ、とき極まりてしかうして轉ず」¹¹⁾を想起せしむるものであり、それが事象を生成流轉の相において觀するものであることは注意すべく、以上ながめたるところによりてもみとめうるがごとく、葉水心が貨幣を論ずるにあたりても常に歴史的立脚點に立ちて論を樹立し想を展開せるの決して偶然でないことを知るべきであらう。

四

以上われは葉適の貨幣思想を、その根本資料と目しうべき水心別集の財計・中及び文獻通考に引くところによりてうかゞつたのであるが、いまそれをこゝにまとめてみれば次のごとく要約することができようか。

葉適によれば世が自給經濟より交易經濟に入れば、交易の媒介手段として錢が發生する。そして交易經濟が發展するにつれてその演ずる役割は大となる。かくてあらゆるものは錢によりて評價せられ、錢によつて左右せられることとなり、ついに錢は神通力を有つとさへ考へられる。しかし、錢の形質は種々雑多でありうる。しかも結局その役割を果たすに最も適當せるものが適者生存をすることになる。例へば開元通寶がそれである。しかし、人々は往々にして錢質を悪くして素材價值と名目價值の差額を利せんとする姦詐を行ふものであり、さうすると經濟社會を混亂せしむる恐があるから造幣の權は政府の手に歸せねばならぬ。また、造幣の權は政治上よりいつても重大なものであるから、その點よりしてもこれを民に許すべきではない。しかし政府といへども造幣の權を

11) 史記、三十、平準書。

握ると財政難につれてとかく悪銭を行ひがちであるが、これはさげねばならぬ。ところが交易經濟が發達して取引の地域が擴大し、取引の數量が増大すると、錢の運搬に不便な場合が起り、そこに紙幣が生じることになる。しかし、一度紙幣が出現すると、より値打のある錢は蓄藏せられて紙幣ばかりが横行することになる。加ふるに銅錢が外界に流失し、器用に銷毀せられるのと政府財政の膨脹とでその勢はますます速進せしめられる。しかも紙幣はこれが作出に錢におけるがごとき素材の制約がない。そこで増發に次ぐに増發を以てし、必然にインフレーションを招來することとなり、物と通貨の割合が均衡を失ひ、通貨多くして物乏しきを來たす。その結果通貨の價值は下落し、物價は騰貴する。そしてそれはまことに經濟界、いな、社會の憂患でなければならぬ。が、これに、その通貨たるや、紙幣、それも不換紙幣たるにおいて、一層甚しいとせねばならぬとする。

まづ、このやうなものが葉適の貨幣思想の素描であるが、かく素描してみると、いまさらながら彼の貨幣思想が穩健妥當なるを知り、流石は治國平天下を高唱する永嘉學派の棟梁と崇めらるゝだけのことはあり、經濟を以て自負するまたむべなるかなの感が深いものがある。たゞしまたかう素描してみると彼の金屬說への偏執もまた明瞭にうき上がってくるのをいかんともすることができぬと思ふがどうであらうか。